



魅惑のW水着

豊尻母と巨乳娘

天草白

挿絵／英田舞

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

| | | |
|-------|---------------------|-----|
| 第一章 | むちむち水着で童貞指導…………… | 4 |
| 第二章 | 練習の後のエッチなご褒美…………… | 60 |
| 第三章 | 夜のプールでロストバージン…………… | 101 |
| 第四章 | お尻の初めてを奪ってほしいの…………… | 149 |
| 第五章 | 混浴露天風呂で母娘3P…………… | 188 |
| 第六章 | 豊尻母と巨乳娘 Wご奉仕…………… | 230 |
| エピローグ | ずっと一緒に…………… | 282 |

登場人物

Characters

辻原宏樹

(つじはらひろき)

県立原河学園に通う高校生。おとなしい性格だが芯は強い。小中学校のころから水泳をしており、一年生ながらも水泳部の有力選手。

高木美帆子

(たかぎみほこ)

市内のフィットネスクラブで水泳やエアロビクスのインストラクターをしている妖艶な美女。クールな性格で性的な経験は豊富。

高木渚

(たかぎなぎさ)

美帆子の娘で、勝気な美少女。原河学園の一年生として転校し、宏樹のクラスメイトになる。男子を凌ぐほどの運動神経を誇る爆乳少女。



「あ、やだ、あつ……気持ちよくなつちや……はああつ……あんっ！」
渚が引き締まった上体を弓なりに反らし、爆乳を両側から、みちつ、みちつ、と思
いつきり扁平に潰した。

今まで以上の圧迫を受けたペニスがひっきりなしに脈を打つ。

「くううっ、そんなにされたら、僕……はああつ……で、出ちやうよお……！」

宏樹がうわずった声で叫び、下腹部をピンと硬直させた。

その付け根で屹立した器官が乳房の狭間でドロドロに灼熱する。

次の瞬間、肉茎が激しく震動したかと思うと、そのまま欲望を弾けさせた。

「きやああつ……あ、ああああつ……んっ、あんっ……！」

赤黒い亀頭の先端から噴水のような勢いで、大量の精液がほとばしる。

欲望の粘液が乳房の谷間をベトベトに汚し、さらに口元や頬、鼻の下にまで飛び散
った。

どびゅっ、どびゅっ、と勢いのよい噴射はなかなか終わらず、渚の顔や胸元に白濁
を染みこませていった。

「はあ、はあ、はあ……い、いっばい出た、ね……ふうっ」
むせ返るような精液の匂いで、渚は大きく喘いだ。

顔や胸の谷間はもちろん、ツルツルとした濃紺の水着の胸元から腹部のあたりまで白濁の点々が散っている。

水泳部員にとつて神聖なユニフォームであるはずの競泳水着を白濁の精液で染め上げられ、背徳的な気分が盛り上がった。

いけないことをしている——妖しい発情があらためてこみ上げる。

渚は興奮でハアハアと荒い呼吸をこぼし、宏樹の下半身に目を落とした。

だらりと投げ出された両足の付け根で、放出したばかりの若莖がムクムクと充血し、立ち上がっていく。

「また大きくなった……！ もっと……はあ、はあ……し、したいの、宏樹？」
力強く屹立した肉棒を目にして、渚は妖しい気持ち昂らせた。

宏樹の体の上から降りて、ふたたび向かい合う。

「あっ……こ、これは、その……！」

宏樹は恥ずかしさとも決まり悪さともつかない表情で、いきり立った股間を手で覆った。

渚が、その手を優しくどかした。

「……いいよ」

目の前で宏樹の顔が紅潮するのが分かった。

渚は心臓が破れるのではないかと思うほどの緊張を感じながら、恋しい少年をまっすぐに見つめる。

「宏樹となら……いいよ」

ハアハアと息が乱れるのを自覚する。

乳房の芯が熱を持っているように感じた。

特に先端部が——左右の乳首が燃えるように熱い。

「ねえ宏樹。あたしと、エッチ……しよ？」

視界がじわりとにじんだ。

宏樹への恋心が胸の中であふれかえり、心臓が内側から爆発してしまいそうなほど鼓動を速めていた。

「あ、あたしの初めて……奪って、ほしいの」

はあつ、と悩ましげなため息を漏らす。

「ぼ、僕も、渚ちゃんと……したい」

宏樹がかすかに——本当にかすかに首を上下させた。

それは渚の懇願に対する、肯定のサイン。

渚は緊張に喉を鳴らして立ち上がった。

こわごとと宏樹の腰をまたぐ。

震える指先で水着のクロッチを横にずらした。

薄く日焼けした周囲の肌と違い、秘処の周辺は常に太陽から保護されているため、抜けるように白い。

小麦色に近い太ももや足の付け根と、そこより内側から秘唇にまで続く真っ白な肌のコントラストが、艶めかしい色香を発散する。

露出した秘処が外気にさらされてひやりとした。

「あ……」

宏樹がまっすぐに渚の股間を見上げていた。

ほとんど無毛に近い、ふつくらとした乙女の恥丘。

肉づきの薄い二枚のラヴィアは処女らしくぴたりと閉じ、すつきりとしたスリットを形作っている。

「じろじろ見ちゃ、いや」

渚が羞恥の吐息をこぼした。

腰を落として、屹立した器官の赤黒い先端部を秘処に押し当てる。

(こ、ここでいいのよね……?)

初めてなので上手く入るか不安だった。

それでも、大好きな少年を身体が一番奥で受け入れたいという想いが上回る。

渚は思いきって腰を落とした。

ずぶっ……硬く張り詰めたものが渚の入り口をゆっくりとこじ開けた。

「んっ……はぁあっ……!!」

先端が入ってくると、渚はポニーテールにした黒髪を振り乱して叫んだ。

鋭敏な粘膜に沁みるような疼痛。

身体を内部から押し広げられるような感触は、生まれて初めて味わう圧迫感だ。

(エッチするって——こ、こういうこと、なのっ……あぁっ!)

唇をかみ締め、声にならない声を心の中で絶叫する。

膣を襲うぴりぴりとした痺れに負けず、渚はなおも腰を落とした。

狭苦しい肉洞にいきり立った器官を迎え入れていく。

「こ、こんな……す、すご……いつ……! あたしの中、で……はぁ、はぁっ……宏樹の、感じるうっ……! う、くうううっ……!」

初めて体感する挿入の感覚は、先ほど以上の、信じられないほどの圧迫感を伴って

いた。

内臓が口から飛び出しそうな錯覚さえ感じた。

痛みがないわけではないが、それ以上に、宏樹の体が自分の内部を押し広げていく拡張感が心地よかった。

何よりも、宏樹によって自分が『女』にされていく感覚に酔いしれる。

「大丈夫、なの……くっ、うううっ……渚ちゃん……」

「へ、平気……宏樹のだったら、あたし全部飲みこみたい……一つになりたい、から」
ハアハアと息を乱す。

繊細な膣粘膜を通して、たくましく膨らんだモノの硬さや太さを感じ取った。

カリ首の出っ張りで膣壁を引っかかれ、ペニスの脈動で胎内を震動させられた。

「一番奥まで来てほしい……！ あたしっ……んっ、はあっ……ひ、宏樹をもつと感じてみたい……」

夢見心地でつぶやいた瞬間、宏樹が下から腰を突き上げた。

それが最後の一押しとなった。

「んっ……うあああっ……あんっ！」

身体の内部で処女膜が裂けるのをはつきりと知覚した。

破瓜の血と愛液とカウパー汁でぬめったペニスが膣底をこつんとノックする。

「すご……ぜ、全部、入ったあつ……ふうっ」

胎内がキチキチに拡張されているような感覚があった。

さすがに初めてなので膣が沁みるような痺れを感じる。

「はあ、はあ……ひ、宏樹とつながってるんだね……ホントにエッチしちゃったんだ、あたしたち……！」

大好きな少年に初めての相手になってもらえた——喜びが胸いっぱいになり、心を熱くする。

「だ、大事な大事な処女、あげたんだから……感謝しなさいよねっ」

渚は嗚咽おえつをこぼしそうになるのを懸命に我慢し、強がってみせた。

ぴくん、とまた膣内で猛々しく勃起した。ペニスが震えた。

繊細な粘膜にまでその震動が伝わり、疼痛がぶり返す。

「あ、んっ……まだ動いちや、だめっ……！」

「そ、そんなこと言われても、気持ちよくて……っいつ」

宏樹が下から悲鳴に似た嬌声を上げる。

身体の一部でつながっている不思議な心地を感じ取っていた。

「んっ……ち、ちよつとずつ慣れてきた」

渚は眉間にかすかな皺を寄せたまま、ゆつくりと上下動を開始した。

じゅぷつ、じゅぷつ、と結合部から破瓜の血と体液の入り混じったピンク色の飛沫がこぼれ出る。

「あっ……はあ、はあ……ね、ねえ、気持ちいい？ あ、あたしの、中」

渚は不安と期待の入り混じった気持ちで宏樹を見下ろした。

恋しい少年は渚の問いかけを肯定するように、嬉しそうに表情を緩めてうなづく。

「すぐく、いいよ……くううううっ！」

宏樹がまた顔をしかめた。

びくびくつとペニスが脈動し、腔粘膜にまでその震えが伝わる。

「あんっ！」

処女を失ったばかりで敏感そのものの肉洞を揺さぶられ、渚は上半身を大きくくしな
らせた。

濃紺の水着にパンパンに押しこまれている二つの豊かな膨らみが、ダイナミックに
上下動を繰り返した。いわゆる『乳揺れ』だ。

「も、もつと見せて……渚ちゃんのおっぱい」

宏樹が興奮したように下から手を伸ばした。

水着のストラップに指先を引っ掛ける。

「あ、だめっ……」

渚が抵抗する暇もなく左右のストラップをまとめてずらされてしまった。

濃紺の水着の中に詰めこまれていた二つの巨大な肉丘が、はじけるような勢いでこぼれ出した。

ふるんっ、ふるんっ、と右、左の順番に大きく揺れ弾むHカップの乳肉。

「きやあぁっ、いやっ、見ないでえ！」

渚が顔を真っ赤にして叫ぶ。

宏樹は感動のままざしを渚に向けた。

「すごい……きれい……!」

日に焼けていないため、乳肉だけが周囲の肌にもいつそう白く浮き上がっている。

新雪のような純白の乳丘の頂点に息づくのは、可憐なピンクの乳首。

「み、見ちゃ……だめだつてば……! 恥ずかしい、からぁっ……いやぁぁっ!」

異性に剥き出しのバストを見られたのは、もちろん初めてのことだ。

二、三年前から急激に成長し、今では同世代を見回しても渚と同じくらいのバストサイズの少女はまずいなかった。

しかし豊かすぎるほど豊かに発達した爆乳は、渚にとってひそかなコンプレックスとなっていた。

転校前の学校で、心ないクラスメートから『お化けみたいな胸』と揶揄されたこともある。

「あたしの、むね……へ、変じゃないかな……?」

重たげな乳房を両手で覆い、おそろおそろたずねる。

「変なわけないだろ！ 信じられないくらい綺麗で、それにすごくエッチで……見てるだけでドキドキする」

宏樹の言葉には、明らかな憧憬の念がこめられていた。

「本当……?」

渚は胸をジンと疼かせた。

今までずっとコンプレックスの対象でしかなかった乳房を、大好きな少年が綺麗だと褒めてくれる——それがたまらなく嬉しい。

「と、特別に触らせてあげても……いい、いいよ」

渚は恥ずかしさをこらえ、乳房を隠していた手をどける。

宏樹は待ちかねたように両手を伸ばし、指先をふかふかの乳肌にしめていった。むにっ、むにっ……十代の乳房は五本の指が食いこんでも、瑞々しい弾力で押し返してしまう。

「うわ、触ってるだけで気持ちいい！」

「ああああつ……やあつ、なに、これえつ……き、気持ちいい……！」

渚もまた、こみ上げる肉悦に酔いしれていた。

自分で触れても乳房に電流が走るような、こんな鮮烈な快感を覚えることはない。だけど宏樹の指が触れると、まるで魔法のように胸の快楽神経が燃え上がるのだ。ぐにゅっ、ぐにゅっ、とHカップの爆乳が縦長に、あるいは横長に潰れ、いやらしく形を変える。

乳房全体が蕩けて溶けてしまいそうだった。

ズブズブと五指すべてが乳肌に深く沈み、揉みしだかれた。

宏樹は興奮に息を荒らげて上体を起こした。

新鮮に実った柔肉に顔を寄せ、頂点で可憐に揺れる。ピンク色の乳首を口に含む。

「あんっ……！」

熱い舌が乳首に絡みついで強く搾った。

チュウチュウと赤ん坊が吸うような音を立てて、乳首を吸引された。

「あつ……はああつ、おっぱいが……さ、先っぽ、痺れちゃ……ああんっ！」

鋭敏なニップルは充血を強め、宏樹の口内で一回り膨らんで勃起する。

右の次は左、そしてまた右と交互に吸われると、たちまち左右の乳首は尖りきり、ジワリとした熱を孕んだ。

「はうんっ！ そ、そんなに吸っちゃ……だめえ！」

渚は悲鳴混じりに上半身をクネクネとよじった。

宏樹が、今度は左の乳首を口の中を含む。

舌先で乳首を押し潰しては、温かな口内に吸引する。

「ちゅうう、んんっ……渚、ちゃ……む、ちゅ……乳首、敏感……れろ、おおっ……
なんだ、ね」

「はあああつ、おっぱいが熱つ……はんっ、あああつ、ど、どうなってるの、よおっ
……あんっ！」

渚は戸惑いをあらわに叫んだ。

乳房の先が火を吹きそうなほど熱かった。

ちよつと先端を舐められ、吸われただけでこんなにも気持ちがいいなんて思わなかった。

自分でも気づかなかつたが、乳房は渚にとって一番敏感な部分らしい。話に聞く『性感帯』というものだろうか。

(気持ちいいよお……！ もつと……もつと吸ってほしいっ……！)

宏樹は渚の双丘を責めながら、腰をしならせて抽送を加速する。

すでに膣の痛みは消え去っていた。

宏樹によつて与えられた肉悦が、ロストバージンの疼痛をほとんど洗い流してしまつたのだ。

代わりに、胎内全体を甘痒い痺れが覆い始める。

「あ、あんっ……なに、これえっ……!! きちやうっ……きちやうよおっ！」

腰の最奥がトロンと蕩けていく感覚がした。

自慰の経験すらほとんどない渚にとって、それは生まれて初めて味わう心地よさだった。

自分でもどうすればいいのか、この感覚をどう受け取ればいいのか分からなくて——渚はただひたすらに、腰を前後にグラインドさせた。



美帆子が真摯な表情で宏樹に語りかける。

何か大切なことを伝えようとしてくれている、と悟り、宏樹もまたまっすぐに美帆子を見返した。ごくりと喉を鳴らす。

「私、君のことが——」

「何やってるの、二人ともっ!!」

突然、悲鳴に似た絶叫が背後から響いた。

振り返ると、湯煙の向こうにポニーテールの少女が立っていた。

滑らかな光沢のある、濃紺の競泳水着姿。

スクール水着を模したデザインの水着は、引き締まったスレンダーな肢体にぴったりと貼りつき、瑞々しい肌をきつく締めつけながら身体の凹凸を浮き彫りにしている。中でも宏樹の視線を惹きつけるのは、女子校生離れたHカップの爆乳だ。

渚が一步步くたびに、水着の胸元にギューギューに詰めこまれた二つの乳丘が、ぶるん、ぶるん、と重量感たっぷりに弾む。

「な、渚ちゃん……!!」

「どうということ!? まさか母さんと宏樹がそんな……」

宏樹と美帆子は抱き合はんばかりに体を寄せ合っているし、おまけに宏樹はペニスを丸出しにしているのだ。今まで何をしていたのかは明らかだろう。

「いつから……なの? 宏樹と、そんな……いやらしい、ことを」

渚が唇をわなわなと震わせた。怒りに燃えた視線を宏樹と美帆子へ交互に注ぐ。宏樹は金縛りに遭ったように動けなくなった。

重たい沈黙が場を支配する。

「いやらしい? 何を言っているんだ? 渚だって宏樹くんと寝たんだろう」

実の娘からの糾弾にも、美帆子は一步も退く気配を見せない。

「ち、ちよつと美帆子さん、何言つて——」

「えっ、どうして知つて——」

宏樹と渚が同時に驚きの声を上げた。

美帆子は表情をふつと緩ませ、納得したようにうなずいた。

「やっぱりそうだったのか」

「……!? ひどい、カマをかけたのっ!」

母に手玉に取られたことに気づいた渚が、顔を真っ赤にして怒声を上げた。

「渚がヤキモチなんて案外可愛らしいところがあるな。母さん、知らなかったよ」
一方の美帆子は余裕綽々しゃくしゃくといった様子で渚を見つめている。

悠然とした態度は、さすがに母親の貫禄といったところ。

渚はキツとした表情で、対する美帆子は微笑混じりに、宏樹へ視線を向けた。

「うっ……」

美しい母娘に挟まれた宏樹は体を硬直させた。すでに頭の中はパニック状態だ。

「……負けないんだから」

ぼそりとつぶやいた渚が身体を寄せてきた。

「ねえ宏樹、あたしのこと好きって言ってくれたよね」

宏樹の右腕にしなやかな肢体をぴったりとくつつける。

「ううっ!!」

むにゅうううっ、と二の腕あたりに豊かな胸の膨らみが当たる。

濃紺の水着の布地は圧迫に伴って皺が寄り、メロンの小玉を思わせる乳肉にぴったりと貼りついた。瑞々しい双丘の形が裸同然に、丸出しになっている。

同時に、ツルツルとした水着の布地を通して、極上のゼリーのような柔らかさとプリプリとした新鮮な弾力を感じた。

(うっ、渚ちゃんのおっぱい、当たってるよお……！)

乳房の感触を意識させようというのか、渚が上体をくねらせ、量感たっぷりの乳房が作り出す深い谷間に宏樹の腕を挟みこむ。

「君を男にしてあげたのは私。だろう、宏樹くん？」

反対側から美帆子がすり寄ってくる。

バストサイズは渚ほどではないが、それでも十分以上に巨乳だし、全体的にムチムチと肉づきのよい肢体は、三十代後半ならではの熟れた色香に満ちあふれている。

美帆子が宏樹の左腕に己の乳房を押しつけた。

その圧力で水着に包まれた双乳がたわみ、扁平にひしやげる。肌に密着した水着の縁から、盛り上がった乳肉の一部が今にもこぼれ出しそうなほど。

渚よりも乳肌全体が柔らかく蕩けるようで、宏樹の腕がズブズブと乳房の中に沈んでいくような錯覚さえ感じた。

(み、美帆子さんまでっ……！)

美女と美少女に左右を挟まれる刺激的なシチュエーションに下腹が疼いた。

「胸だけじゃない。お尻だって君の好きにしたいんだぞ？」

美帆子が見事にくびれた腰をくねらせて双尻を突き出した。

二つの盛り上がりは完璧な球形を描き、引き締まっていながらも、たつぷりと肉がついている最高の美尻だ。

ハイレグに包まれた豊かな尻肉は、美帆子が腰を振るたび、たぶん、たぶん、と上下に弾む。

「どうだ？ 渚よりずっと大きいだろう」

腹の下がさらに疼き、甘酸っぱい官能が腰骨を震わせる。

宏樹は夢遊病患者のようにフラフラと手を伸ばし、美帆子の臀部に手のひらを這わせた。指先に伝わってきたのは滑らかな化学繊維生地感触と、脂の乗りきったムチムチとした尻の弾力感。

「あ……んっ！ もっと強く、揉みなさい……ああ、搾ってえ」

宏樹にもっと触ってほしいといわんばかりに、美帆子の双尻は宏樹の手のひらにびったりと吸いついてくる。こみ上げる欲情のまま、宏樹は上質のマッシュマロを思わせる二つの尻肉を力いっぱい揉みしだいた。

海綿体への充血が増し、見る見るうちに宏樹の分身器官がムクムクと立ち上がっていく。

「ちよっと、宏樹！ 母さんがすり寄ってきたとたんに、そんなになるなんて……あ

たしより母さんのほうが魅力的ってこと!? 母さんのお尻がそんなにいいの!?

渚が尻を吊り上げ、宏樹の勃起現象を見咎めた。

「宏樹くんは私みたいな大人の女がお気に入りなのさ」

勝ち誇ったように告げる、美帆子。

「悔しい……! でも、ムチムチした色っぽさじゃ母さんに勝てないし……」

渚はムツとしつつも、効果的な反論を見出せないらしい。

「い、いや、そんな! 二人とも、すぐ魅力的だよ」

宏樹のほうは言い訳しながら、気まずい思いで顔を逸らした。

男子校生の若い茎は途中で勃起を止めることなどできない。

渚の目の前でなおも膨張を続け、ヘソにくつつきそうな角度まで反り返った。

「そ、そうだ、母さんがお尻なら、あたしはおっぱいで——」

対抗心を刺激されたのか、渚はいきなり宏樹の前に跪いた。

「あたしだって宏樹を気持ちよくできるんだからっ」

湯船にヘソのあたりまで浸かり、重たげな乳肉を裾野から持ち上げる。

バストの下部を覆う水着の生地がピンと張り詰め、逆に深い谷間のあたりには淫靡な皺が寄った。光沢のある布地に包まれた双丘は、より立体感を増して宏樹の視覚に

いやらしい刺激を与える。

(渚ちゃんのおっぱい、エッチすぎるよう……！)

胸にメロンでも入れているのではないか、と思えるほどの爆乳でありながら、まったく垂れておらず、しかも張りがあってムチムチとした見事な乳房。

その日カップバストで、九割方屹立している肉柱を挟みこまれた。若竿の表皮に、化学繊維のツルツル感と乳肉のまろやかな弾力が同時に、心地よく広がっていく。

「あうっ……」

突然の——それも美帆子が見ている前での、渚からのパイズリに宏樹は息を飲んで立ち尽くした。

渚は水着に包まれた双乳を中央にギュッと寄せる。

「う、くううううううっ！」

宏樹は眉を寄せて喘いだ。

十代の乳房特有の弾力によってペニスに甘美な圧力がかかっている。

「ど、どう？ あたしのおっぱい……んっ、くっ……大きさにはちよつと……ん、ふうっ……じ、自信があるの」

頬を紅潮させる渚。

「色気じゃ母さんに……かなわないかもしれないけど、おっぱいなら……ん、ふうっ……あたしの、ほうが……んんっ」

Hカップの爆乳を上下させるたびに、ゴム鞠まりを思わせる瑞々しい乳肉が柔らかな摩擦感を肉棒に送りこんできた。

時折、硬く尖ったピンクの乳首が水着越しにもはつきりと分かるほどのコリコリとした硬さで竿に触れ、乳肌とは異なる鋭い刺激を与えてくれる。

まさしく乳房全体でペニスに奉仕する渚を見下ろし、下腹を疼かせた。

「宏樹くんを独占なんてさせない。私だつて——」

目の前でパイズリに励む娘に感化されたのか、美帆子までが宏樹の足下に跪いた。渚と同じようにヘソまで湯船につかり、Fカップの乳丘を宏樹の男根に近づける。

「えっ、まさか二人で……!? んっ、くはああっ……!」

信じられないほど贅沢な光景に、宏樹は呆然と喘いだ。

渚よりは小さいが、それでも標準よりはるかに巨乳なFカップのバスト。

柔らかくペニスを包みこんでくれる感触が、三十代ならではの母性を感じさせた。

しかも肉づきのよいグラマラスな肢体が、パイズリの動きに合わせて淫らにくねるのだ。

(くうううつ、美帆子さんの身体、ムチムチして……すごくエッチだよ)

さすがに色香という面では、十代の渚に比べて一日の長いちじつがある。

もちろん渚には渚の、開花寸前の蕾のような青い魅力があり、総合的には甲乙つけがたいのだが。

「あたしのおっぱいのほうが気持ちいいよね？」

「大人のテクニクを見せてあげる」

渚の若い乳肉が、ぷりっ、ぷりっ、と宏樹の亀頭を圧迫する。

美帆子の柔らかな乳肉が竿のあたりを、むにゅっ、むにゅっ、とくるむ。

HカップとFカップの乳房は互いにぶつかり合い、柔らかくひしゃげながら、宏樹のペニスを先端から付け根に至るまで、いやらしく包んだ。

「うっ、うううううっ……二人がかりで、なんて……はあっ、ああっ……!!」

美しい母娘を同時に足下に跪かせ、奉仕を受けているというシチュエーションが、宏樹の征服感を心地よく刺激する。

美帆子と渚の動きが次第にリズムを速め、肉茎への摩擦を強めていった。

滑らかな生地に竿を撫でられ、モチモチとした乳肌で亀頭をこすられて、肉棒が快樂で溶けてしまいそう。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!